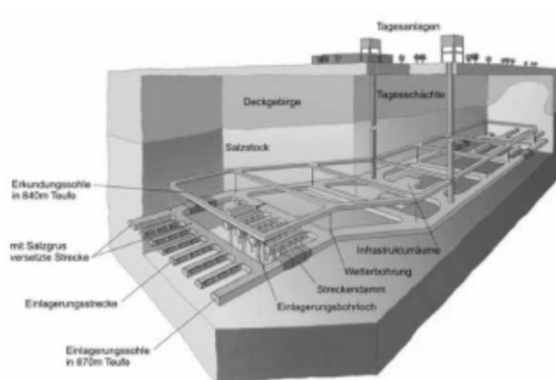


3.9 さよなら原発関西アクション

澤井正子さんの講演「核燃料サイクルの終焉」より



ゴアレーベンの地下施設



私は昨年春まで原子力資料情報室にいて、26年間核燃料サイクル、主に六ヶ所再処理工場のことをやってきました。六ヶ所再処理工場は20年以上工事しっぱなしです。でもいまだに完成していません。普通の企業の工場だったらあり得ないです。破綻している核燃料サイクルがなぜ終わらないのかを考えてみたい。

プルトニウムを原子炉で作って、再処理して、高速増殖炉に渡すという政策がすすめられてきましたが、高速増殖炉ももんじゅも再処理工場もまっとうに動かない。サイクルが破綻しているということは私が原子力資料情報室に入った当時から言われてきています。六ヶ所も工事開始から20年以上で、すでに老朽化が始まっていて、とんでもない状態。

もんじゅが使えないのでプルサーマルだとなってみたものの、それもうまくいかず、福島事故以降はもっとうまくいかなかった。結果、日本で最大のプルトニウム所有者は東京電力です。英仏に委託した分、六ヶ所にある分の半分以上を東電が所有しています。福島10基はもう動かせず、新潟の6基も地元が頑張るといっている。東電は原子炉を動かさないのにプルトニウム15トンの所有者。とんでもない矛盾した状況が続いています。余剰プルトニウムがすごく問題になっていますが、日本は東海、セラフィールド(英)、ラ・アーグ(仏)、そして六ヶ所という4つの再処理工場を使ってプルトニウムを生産してきた。これは世界最大レベルです。

最初はみんな「増殖」を目指していましたが、現在彼らの資料を見ると「増殖」の言葉はありません。

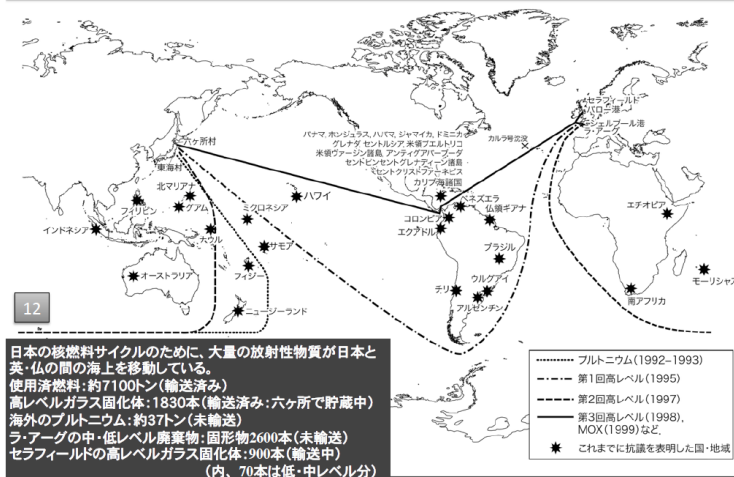
「高速炉」というようになった。スーパーフェニックスも現在解体中で、ドイツのNSRも遊園地になっている。米・英・独・仏が撤退し、日仏は共同でアストリッド開発をすると言っていたが仏マクロン大統領が予算を付けない決定をしました。残ったのはロシア、インド、中国ですが、これらは事実上の核兵器所有国。あるのは開発「計画」だけで、実際に行われるかもわからない。

六ヶ所のお手本であるゴアレーベンの「核燃料サイクル・パーク」について少しお話しします。ゴアレーベンは旧東ドイツ・西ドイツの国境に位置しています。古い資料によると、ゴアレーベンには再処理工場、ウラン燃料・MOX燃料加工工場、高・中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設、高レベル廃棄物最終処分場などが計画されていました。実際にゴアレーベンには地下施設が作られていて、メルケル政権が脱原発を決定する2011年までは研究開発が行われていました。

ここでのコンセプトは「輸送」です。ドイツもウランを持っていないので他から買い、持ってくるわけですが、核燃料サイクル・パークの基本概念は、この中に最終処分場まで含めてすべてを作ること。輸送はゴアレーベんと(MOXを使う)原発の間でしか行われぬ。それ以外のことはこの施設内で行われ、高・中・低廃棄物もここで処分する、という考え方なんです。要するに、余計な輸送は一切やらない。日本も実は真似をしようとしたわけです。

核燃料サイクルを、核燃料の移動の面からとら

高レベル廃棄物・プルトニウム・MOX燃料の輸送ルート



えてみてください。オーストラリアや南アフリカなどから買い、米国に送って濃縮して、核燃料にして日本に運ぶ。核燃料サイクルの図の間にはほとんどない輸送があるわけです。石油がなくなれば輸送もできず、輸送できなければ原発は動かさせません。

下図は日本の高レベル廃棄物・プルトニウム・MOX燃料の輸送ルートです。今でこそパナマ運河を利用できますが、最初は高レベル廃棄物とかMOXなどヤバイものをここに通すことはできなかった。英仏に再処理工場・MOX工場がありますが、廃棄物やMOX燃料は南米経由、もしくは南アフリカ経由でぐるっと太平洋諸国を回って日本にやってきます。日本からは使用済燃料7100トンを英仏に送りました。そしてそのごみ・プルトニウム・MOXがこうしたルートで帰ってくる…ということを何十年とやってきたわけです。これがなかなか日本人に見えないし、気が付かない。たまたまこれまで事故がなかったからよかったようなものの、本当はすごく危険。高レベルが初めて日本に帰ってきた際、単なる「輸入品」として帰ってきて、法律の規制も何もなかった。

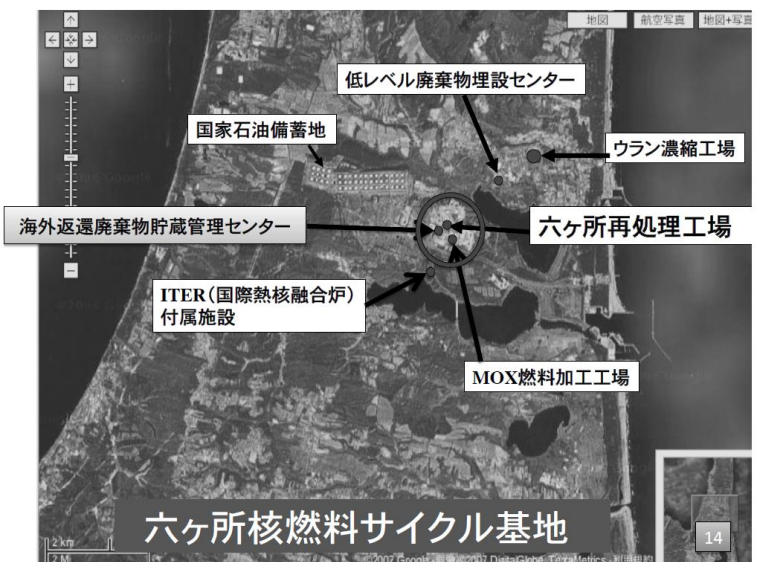
こうした輸送をやらないようにしようとしたのがドイツです。核燃料サイクル施設というのは最終処分場があつてのもの。ドイツは最初から最終処分場をゴアレーベンに定めつつも、考えてやめたわけです。ただドイツも最終処分の仕方に大いに問題があった。アッセという場所では非常にずさんな形で中・低レベルのごみを捨て、後になって問題が発覚し、今全量回収することになっていま

す。モルスレーベンという地でも同じようにため込んでいましたが、ここも閉鎖して全量回収することになっています。どこでも廃棄物というのは投げやりにされていた政策だと言えます。

六ヶ所の周辺は下図のようになっています。大間の原発はフルMOXですが、これは完全に六ヶ所の余剰プルトニウム対策の原子炉です。誰もここからの電気を期待していません。というのは、個々の電気を北海道電力から九州電力までのすべての電力会社が買います。130万キロワット出力でも電力会社の数で割ってしまえば受け取る量はわずかなもの。

下北半島には様々な施設があります。基本的にはウラン濃縮工場と再処理工場、そして海外返還廃棄物貯蔵施設。もう一つ、低レベル廃棄物センターがあり、「原発から出る」低レベル放射性廃棄物に限る、と法律では決められていますが、自民党が多数なので法律はいくらでも変えられます。医療や研究所の廃棄物などが送られる可能性も。ここはもともと、むつ小川原開発の土地ですので、「陸地はいくらでも余ってますよ」と推進側は宣伝していて、いくらでも処分場が作れるという言い方をします。もちろん六ヶ所再処理工場はプルトニウムを作り出すので、MOX加工工場が必要ということで、一緒に作られている。そして同時に、このエリア全体が大・風車基地にもなっています。再処理工場が動けば風車は汚染されるわけですが、「風車の電気はクリーンだ」なんて言われることに。

六ヶ所の場合は、電事連は処分場も作りたがっているけれど言い出しかねています。ただ、東通の



部分に東北電力が 2 基、東京電力が 2 基の原発を建てる計画が公になっていますが、実際には東電は 10 基分の土地を買い占めています。だから例えば東通の村長さんは「俺のところ最終処分場もってこい」と一生懸命アピールするような状態です。むつの中間貯蔵施設については、関西の皆さんは「関電が狙っている」というニュースで知っているでしょう。今のむつの施設は東電と日本原燃の持ち物です。日本原燃は東海と敦賀原発の所有者なので、そこから出たごみを運ぶと言いつてしているが、状況は変わってきています。現在 3000 トンの建屋が立っていますが、最終計画は 5000 トンといわれています。その意味で、ほかの中間貯蔵を持っていない会社が狙うだろうと言われているわけです。

六ヶ所の核燃料サイクル基地を読み解くときには次のことに注目してほしい。最終処分場を誘致する村長さんが現れて住民も賛成するようなことはまず考えられない状況で、今狙われているのは「中間貯蔵」です。これを私たちが許してしまうと、原発（の使用済み燃料貯蔵能力）に余裕を作らせてしまうことになるし、下北半島をますます「ゴミの処分場」みたいにしてしまう。原発を止めるのは大前提で、その先どういう風にするのか。核燃料サイクルが終わらない理由は、ごみの処分をどうするかが全く考えられてこなかったことにあると思います。

今、高レベルと六ヶ所再処理分が電気・送電料金に乗っているのを知っていますか？ 皆さん払っているんです。処分場については 300 年の予定で、

まだ生まれていない子どもまでも日本で電気を使えば払わざるを得ないようなシステムになっています。だから誰も何も言いません。六ヶ所で行くらかかろうと、何年かかろうと、ごみのお金を国民は黙って払うから電力会社も政府も困らないんです。そうになっているわけで、「自然エネルギーを使っているのに何でそんなお金払わなきゃならないんだ」と文句言っていきたいと思います。

最後に言いたいこと、1 つは福島第一原発事故で明らかになったこと。それは、電力会社も政府も原子力規制当局も誰も事故の責任は取らないということ。被ばく者も避難者も十分に保証されません。突然、家に戻ってご飯が終わったくらいで、原子炉がおかしいから手荷物を 1 つか 2 つ持って家を捨てて出る、と言われたんです。浪江の人も大熊の人も。皆さんできますか？ 病院で寝ていた人たちは点滴や吸入器具を外され、救急車ではなく普通のバスで、横になっていた状態から縦にされて運ばれたんです。雪の降る真冬に。途中で到着した体育館・避難所などでたくさん死んでいるんです。その保証が全然きちんとされていない。東電は責任を取ろうとしていません。裁判で自分たちは責任ないと主張しています。国も知らんぷり。原発なんてやっていたら私たちの命が危ないことははっきりしています。

だけど原発はこれだけある。これから止めて、ごみの時代に入ってきます。ただ「ゴミの議論を始めましょう」と生ぬるいことを、今の枠組みのまま言っているだけではいけない。今の枠組みで議論するだけだと、また適当に委員会なるものを作って「だからこうやるんだ」という話で終わってしまう。私たちが議論を始めるにしても、今の社会の枠組みではいけない、もっと違うものを枠組みから作っていく、ということをやらなければ

いけない！というのが私が最後に言いたいことです。核燃料サイクルで再処理だ高速増殖炉だといっても、全然できないことだし、ごみを増やすだけのこと。六ヶ所を止めていくということは原発を止めていく相乗効果があると思っています。六ヶ所再処理の稼働を止めて、脱原発の先の議論を私たちが新しく始めることが重要だと思っています。

(編集：宮崎)

核燃料サイクル政策 = 終わりのない廃棄物問題の先送り政策

- プルトニウムの生産が遅延していることは問題ではない
→ 常に余剰プルトニウム問題でしかなかった。
→ プルサーマルも進まず、再処理工場の運転制限の可能性
- 本音「ずっと試験操業でもいい」
使用済燃料を六ヶ所再処理工場に輸送できず、原発の運転が止まることにしか、国と事業者の関心はない。
青森県、六ヶ所村は、「核のごみ」による補助金頼み。：核ゴミが欲しい！
- 六ヶ所再処理工場の真の目的は、「核のゴミ捨て場」確保
再処理工場プール（当初規模は 12000 トン→現行 3000 トン→3000 トン増設可能
むつ中間貯蔵施設（現在 3000 トン→5000 トン、さらなる増設の可能性）
- あらゆる放射性廃棄物の中間貯蔵・最終処分場としての役割。
海外返還廃棄物の中間貯蔵施設（最終処分場はない！）
低レベル廃棄物最終処分場（現在は原発用。しかし医療用、研究用廃棄物、他、）
- 国・電力会社は、いつも「その場のしぎ」と「場当たりの対応」
高レベル最終処分場 → 確保できないうちは、再処理と中間貯蔵でしのぐ。
中間貯蔵：永久保管の可能性